

《修士論文要旨》

近畿地方における中津式土器の変遷と展開

乾 茂 年*

西日本の縄文時代後期初頭には中津式土器が位置付けられている。中津式土器の特徴は、磨消縄文手法で器面を飾る土器であり、北九州～関東まで広域分布している。しかし前段階の中期末の土器群は、強い地域性を有しており、各地域で独自性を持った型式が存在している。近畿地方では泉拓良氏によって北白川C式を設定し、中期末の編年の大枠が定められた。しかし、この時期に併行する他の地域の土器様相が把握困難なことや、その型式同定が困難な土器群も多く、編年自体が揺らぎ始め編年の再検討が迫られている状況下にある。

そこで本稿では、まず、資料が充実している奈良県・大阪府・徳島県の遺跡を対象とし、従来の文様を主体とした後期初頭の土器編年に口唇部調整・口唇部形態・口縁部形態の属性も組み合わせ総合的に検討を加え編年の再構築を行った。結果、後期初頭の土器編年を4段階（中期末・中津Ⅰ式・中津Ⅱ式・福田K2式）に分けることができた。その編年の内容は従来の文様を主体とした編年の枠組みと大きな差を検出することは出来なかった。しかし、口唇部形態が各段階において著しく変化することが確認できたため、文様形態だけではなく、口唇部形態でも時期的傾向が示すことができると考えられる。また、磨消縄文によって斉一化した中津式土器の中にも器面調整・口唇部調整・口縁部・口唇部・文様ともに明確な地域差が存在していることが確認できた。

後期初頭の編年を再編成した時に、各属性において地域差が明瞭に確認できた。しかし、それは分析対象地域のみが異なっているパターンも想定されるため、資料数が確保される中津Ⅰ式土器を対象とし近畿地方内の同時期の土器の属性をピックアップし①文様の地域差、②口唇部文様の有無、③粗製土器の有無、④縄文の撚りの地域差、⑤底部形態の地域差、⑥沈線文土器の有無の6つの属性に分け、それぞれを比較し地域差がどのような広がりを持って重なるのかを確認した。その結果三重・滋賀・京都南部の第1グループ、奈良・大阪・和歌山の第2グループ、福井・京都北部・兵庫北部の第3グループ、兵庫県南部の第4グループの4つの小地域に分類することが出来た。その地域性は中期末の伝統や他地域の土器製作技法などが要因となって、地域差が生じていることが把握できた。当初中津式土器は広域分布することから、広域的な視点を主体とし、土器の地域差についての言及はさほどされてこなかった。しかし、各属性で土器を確認すると大きな地域差というのが存在していることが改めて確認された。

しかし、それと対照的に広域に分布する磨消縄文手法による土器の装飾の共通性が特殊であることについても改めて認識することができた。そのため、磨消縄文手法がなぜこれだけ広域的に広がるのか、その社会的要因について考察を加える必要があると考えた。

平成24年度 *文学研究科文化財史科学専攻

中津式期から器種組成の中に少量ながら双耳壺という器種が入ってくる。この器種の分布は地域的な隔たりを持たず、広域的に分布する。そのため、中津式土器を製作使用する集団においては、文様と同様に双耳壺は特別な用途がある可能性や、集団における行動の共通性を見出すことができる可能性がある。そのため、双耳壺有する遺跡の石器組成や遺構の伴い方などからセトルメントパターンを見出し、双耳壺を広域的に所有する集団の共通性や社会性について考察を行った。その結果、石器組成のバランスの取れた通年利用を行った可能性がある遺跡での出土は少なく、石器バランスの偏ったキャンプサイトに近い意味合いをもつ遺跡からの出土量が多いことがわかった。縄文時代後期初頭は気候の変動があり、寒冷化したことが指摘されている。それが環境に変化を与え、食料資源に変化が起こり、生活が不安定になったため頻繁に豊富な資源を求め季節的な移動を行った可能性を想定した。そのため、広域的な移動や交流を頻繁に行うこととなったため、中津式土器の類似した文様や生活様式が広がっていったのではないかと考えた。また、双耳壺の用途については、廃棄において祭祀的な用途を想定した。しかし、出土状況に統一性がないため、必ずしも一定の用途だけではないことが想定される。